

第30回 日本製鉄音楽賞 受賞者インタビュー



フレッシュアーティスト賞
大西 宇宙氏

日本の音楽文化の発展と、将来を期待される音楽家のさらなる活躍の支援を目的として1990年に創設された「日本製鉄音楽賞」は本年で30回を迎えます。本年の受賞者は、将来を期待される優れた演奏家に贈られる「フレッシュアーティスト賞」にバリトンの大西宇宙氏、音楽文化の発展に大きな貢献を果たした個人に贈られる「特別賞」には、清里音楽祭創設および音楽監督・ゆふいん音楽祭音楽アドバイザー・ピアニスト・チェンバリストである小林道夫氏が選ばれました。

フレッシュアーティスト賞



大西
宇宙氏
(バリトン)

まだ山の麓に立つたばかり。
劇場に生き続けられる
歌手でありたい。

©大塚道治/2019OMF

(プロフィール)

1985年東京生まれ。武蔵野音楽大学・大学院卒業。第62回全日本学生音楽コンクール第1位。2009年第1回 IFACジュリアード音楽院声楽オーディションにて最優秀賞を受賞し、日本人としては数少ない声楽専攻生としてジュリアード音楽院に入学。在学中、アメリカのオペラ・インデックス(2012)、リチャ・アルバーゼ=ブッチー二国際コンクール(2013)などのコンクールで第1位を獲得し、15年モントリオール国際コンクールではファイナリストに選ばれた。18年にはプレミエ・オペラ財団国際声楽コンクール(NY)で優勝し、同時にホロストフスキー記念特別賞を受賞。19年8月セイジ・オザワ松本フェスティバルのチャイコフスキーのオペラ「エフゲニー・オネーギン」でタイトルロールの代役を務め、日本での本格デビューを果たす。現在、ニューヨークを拠点に活動続ける。

ごく一般的なレベルでした。

——それで音大の声楽科を目指されたのは？

きっかけは2つあります。1つは高校時代、ミュージカルに心酔したこと。特に好きだったのが「ジーザス・クライスト・スーパースター」。初めてテレビで観たときに圧倒されました。それをきっかけに舞台芸術全般に興味を持つようになってオペラも観るようになりました。

もう1つは友人の一言です。楽器での音大進学は自分には難しいけれど、なにか音楽を続ける道はないかと考えていたら、友人が歌をやってみたらと言ってくれました。歌は人類最古の楽器だと言われ、その言葉に背中を押されました。

——武蔵野音大からニューヨークのジュリアード音楽院に留学されました。クラシックを学ぶのにアメリカを選ぶのは珍しいのでは？

確かに先輩たちもほとんどがヨーロッパに留学していました。ただ、僕の場合、高校を卒業する間際にアメリカに行き、メトロポリタン歌劇場でオペラを観た経験があって、ニューヨークへの憧れがずっとありました。大学院卒業後の進路を考えていたとき、ジュリアード音楽院声楽オーディションが日本で開催されるという機会があり、最優



ジュリアード音楽院、オペラ公演のリハーサル中の1コマ



2019年、殿堂カーネギーホールでの公演



シカゴ・リリック・オペラの公開オーディションにて、合格決定時の1コマ

《道化師》リハーサル風景

秀賞をいただいて留学のチャンスを得ました。

——ジュリアードでは当然、英語でのレッスンだと思えます。また、オペラはさまざまな言語で歌うわけですが、もともと語学は得意なのでしょうか？

英語自体は得意で、学生時代も好きで独自に勉強していました。留学にはさらに高いレベルが求められました。米国の大学院レベルに追いつくために、ジュリアード入学前に語学留学もしました。今でこそアメリカのラジオ番組などでインタビューがあっても、流暢に受け答えできるようになりましたが、最初はとても苦労しました。電話に出るのが億劫でしたね(笑)

オペラはこれまでイタリア語、ドイツ語、フランス語、英語、ロシア語、スペイン語、ラテン語、日本語で歌っています。フィンランド語でも1度歌いました。確かにこれだけいろんな言葉を扱う芸術はほかにはない。ジュリアード音楽院ではドイツ語をはじめ、歌に必要なさまざまな言語を習得したいと思い、その都度必要なレッスンを積極的に受けていました。

世界中を飛び回る日々

——声楽家として、ふだんはどんな生活を送っていますか？

移動が多いですね。今年は1月から3月までは週単位で移動していました。僕はまだ若手なので、公演の合間に各地でオーディションを受けることもあります。コロナ禍で国境が閉じるまで、アメリカ、中国、ヨーロッパと8カ国を移動しました。さすがにこのようなことはまれですが(笑)

——舞台では堂々とされていますが、大観衆の前で緊張はしませんか？

もちろんします。ただ、僕の場合は緊張の前借りテクニックがあって、本番前にあえて最悪のシ

ナリオを考えるようにしています。あまりあり得ないことですが、舞台上で転んだり、大事な歌詞を忘れたり、そうやって最悪の状況を想定しておけば、舞台に出たときに、冷静になることができます。ただ、これは結構度胸のいる方法で、ある友人に教えたら余計に緊張したと言われました(笑)

——これまでに一番印象に残っている公演は？

どの舞台も印象的ですが、まだシカゴの劇場の研修生だったころ、ある公演に代役として参加しました。その日はゲネプロという観客を入れた本番さながらのリハーサルで、演目の最後の場面、主役が突然、声が出ないと降板してしまったのです。一般的に、代役は若手の勉強のためであり実際に演じることはまれなのですが、突然場内アナウンスでステージに呼ばれ、訳もわからずエレベーターを降りたら、はたまた急に衣装チームから衣装を渡されました。演出助手があわてて駆け寄ってきて「You can do this, right? (できるよね?)」と言われ、その瞬間に音楽がスタート。そこは演目のなかで最も難しい場面でしたが、無事代役を務められたという経験があります。あのときの興奮はなかなかおさまりませんでした。また声楽家の卵だった自分には、この経験が大きな自信につながりました。

——最後にこれからの抱負をお聞かせください。

いつもいろんなところでお話しさせていただいているのですが、息の長い歌手になりたいです。こうした賞をいただいたことで、これまでの活動を評価していただけたこと、大変うれしく思っています。しかし今が頂点ではなく、大器晩成でありたい。まだまだやりたいことはたくさんあります。ヨーロッパの舞台にたくさん出たいし、劇場で生き続けられる歌手でありたい。自分の音楽人生が大きな山とするなら、自分はまだ山の麓に立ったばかり、そう思っています。



特別賞

小林 道夫氏

特別賞

音楽から聴こえてくるものは
人間そのもの。
知性と感性を磨き続ける
大切さを思う。



2016年12月23日、東京文化会館 小ホールにて 撮影：伊藤竜太

（音楽監督・音楽アドバイザー・ピアニスト・チェンバリスト）

小林 道夫氏

音楽家になられたきっかけをお聞かせください。

小児科医であった父は音楽好きで、家には燭台の付いたドイツ製のアップライトピアノがありました。母はごく一般的な主婦でしたが、文化学院で山田耕筈氏に音楽を習ったことがあったそうです。家ではよくクラシック音楽が流れていて、戦前の当時としては、一般家庭より音楽に触れる機会は多かったと思います。

本格的にピアノを習い始めたのは中学1年の終戦後でした。高校3年の進路を決める時期はほかに選択肢が見つからず、当時できたばかりの藝大の楽理科に入りました。そこで、高校時代から好きだった伴奏をたくさんするようになって、それが今につながっています。音楽の仕事を選んだのも、実際のところそれしかなかったからで、何か特別な決心をしたわけではありません。

演奏活動と並行して、山梨・清里や大分・湯布院など地域の音楽祭に長くかわつてこられました。

清里音楽祭は30年続きました。もともと東京・国立でレコード店を経営していた岡田

芳昭氏の企画で、私は音楽監督とは名ばかりで、人選、構成、交渉など大変なことは主催者である岡田氏がほとんど受け持ってくださいました。やはり印象に残っているのは第1回目です。巖本眞理弦楽四重奏団というプロ中のプロと共演しましたが、今も当時の緊張を思い出すと身体がこわばれる感じがします。ちょっとした気配がゆるむと弦の音にピアノが弾き返され、音楽家にとって「演奏」とは、自身の全存在をかけた精神的な行為なのだ

と痛感しました。

湯布院は交通の便が決して良いとは言えないし、立派なホールもありません。予算もなく実行委員が町中を走り回って寄付を集めるなかで長く続いていたのは、地元の何人かの音楽を本当に愛する人たちの熱意と実行力、そして初代監督の岸邊百雄さんの室内楽の深いご経験とお人柄だと思います。そんなふうに地元の皆さんが心を開いて歓迎してくれ

清里音楽祭にて。安田謙一郎氏（右端）、ソプラノ歌手のカトリーン・グラーフ氏（右から2番目）、フルート奏者のペーター＝ルーカス・グラーフ氏（前列右側）と小林氏ご家族



初来日したリコーダー奏者・指揮者のフランツ・ブリュッヘン氏と

1985年4月24日、日本モーツァルト協会 例会。イノホールにて、アーリーン・オジェ氏と共演

東京藝術大学バッハカンタータクラブの皆さんと紀尾井ホールで演奏した



ゆふいん音楽祭にて、
初代監督の岸邊百雄氏と

(プロフィール)

1933年東京生まれ。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。ドイツ留学後、チェンバロ、ピアノ、室内楽、指揮など多方面にわたり活躍。70年には東京藝術大学バッハカンタータクラブの指揮者に迎えられ、のちの日本のバッハ演奏の中心となる演奏家を数多く育てた。56年毎日音楽賞・新人奨励賞、70年第1回鳥井音楽賞(現サントリー音楽賞)、72年ザルツブルク国際モーツァルトウム財団モーツァルト記念メダル、79年モービル音楽賞を受賞。75年に「清里音楽祭」を創設し、2004年の第30回終了まで音楽監督を務めた。81年から「ゆふいん音楽祭」にも参加し、音楽アドバイザー(2004~09)として地域の音楽振興に尽力。国立音楽大学大学院教授、東京藝術大学客員教授、大阪芸術大学大学院教授を歴任し、現在、大分県立芸術文化短期大学客員教授。

ました。そこで生まれる心の交流に感銘を受け、病みつきになる演奏家は多かったと思います。

——ピアノ、チェンバロ、フォルテピアノ、そして指揮と多岐にわたりご活躍されていますが、ここまで広い分野を極めている方は少ないのではないのでしょうか。

確かにいろいろな方面に手を出していますが、自分としては第一義には声楽の伴奏者だと思っています。ピアノも、高齢になって体の無理がきかなくなってきたことで逆にわかってきたことが増えたとし、チェンバロも昔と今では演奏様式が違ってあるのでまだまだ勉強中です。フォルテピアノや指揮も、自分なりには一生懸命やっているつもりですが、とても極めたなどとは言えません。

ただ、さまざまな楽器を極めることは、私はもちろん、誰にでもできることではないと思いますが、楽器に幅広く興味を持つことは必要なことではないでしょうか。そうでなければ楽器を操るだけで、音楽家とは言えないと思うのです。

——音楽家としてのやりがい、また、音楽家として生きる難しさとは何だとお考えですか。

どうお答えすればよいかわかりませんが、音楽から聴こえてくるのは、結局、人間そのものという気がします。そのため、自分の人としての知性・感性を磨き続けることの難しさではないのでしょうか。超一流の演奏家と仕事をさせてもらって感銘を受けるのは、彼ら

の教養の広さ、深さ、そして人としての度量の広さであったと思います。

唯一の存在、それがバッハ

——東京藝術大学バッハカンタータクラブは今年創立50周年を迎えます。バッハ演奏の第一人者として、バッハの魅力をお聞かせください。

第一人者というのは言い過ぎですが、50年も毎年ゴルトベルク変奏曲を弾く機会を与えられている幸運は例がないかもしれません。バッハという音楽家はただ一人、ほかの音楽家と違っています。特に晩年の作品は、勉強すればするほど目がくらむばかりで、人体の不思議さ、霊妙さをのぞくような感じがします。構成にいろんな仕掛けを張りめぐらすことは、ひょっとしたらとんでもなく頭の良い人であればできるかもしれませんが、耳で聴いてそれが美しい音楽になっているとしたら、人間業ではないけれど、それができたのがバッハです。

カンタータクラブで数多くの演奏をし、マタイ、ヨハネの両受難曲の指揮まで体験できたことは、私の音楽人生のなかの一番の財産です。

最後に今後の抱負をお聞かせください。

この歳になって、ピアノを弾く楽しみがだんだん大きくなってきました。高齢になって衰えてきた分、余計な力をそぎ落とすことで音がどんどん変わってくるのです。自分の楽器からこんな音が出るのだという喜びを感じながら勉強を続けています。

これからのピアノの勉強を続けたいのですが、許されるならば若い演奏家の方々、特に声楽家とその伴奏者にアドバイスをする機会を持てればと思っています。いつまで体力と気力が保てるかが問題ですが、抱負というより、今するべきだと思っていることです。